

7/31 ゼフィルス・ピアノ五重奏団 第6回定期演奏会

「西風の神」に由来するゼフィルス・ピアノ五重奏団は常設のユニットとして設立から7年、重厚な活動を継続している。今回はサブタイトルに「ライブツィヒ〜創造の軌跡〜」とあるように、ドイツゆかりのプログラムで構成された。まずはレントゲン「ピアノ五重奏曲第2番」。ドイツ後期ロマン派に立脚し、多様なファクターが混在する作品である。第1楽章では憂鬱な冒頭からヴィオラとピアノの細かい音型に根差して第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンのやや玲瓏ながら艶やかな掛け合いが美しい。第2楽章のキレ味鋭いパッション、第3楽章では悲歌ふうの哀切を各楽器が音色を融合しながら、あるいは屹立しながら織り上げていく。そして第4楽章ではピアノのアルペジオに乗って印象的な旋律をチェロ、ヴィオラ、2台のヴァイオリンが受け継いでいくが、当時の世情を移すような暗澹たる美学が漂う。ワーグナー、J.S.バッハも省内に向かう高い音楽性と巧緻なアンサンブルが印象的であったが、シューマン「ピアノ五重奏曲」では、燃えるようなエモーションで5人が渾然一体となって進んでいく展開から饒舌なロマンティシズムがあふれだし、精妙な哀感と格調高い情感で作品の輪郭を明確に織り上げた。 ●真嶋雄大
会場＝TOPPANホール／曲目＝レントゲン「ピアノ五重奏曲第2番」、ワーグナー《ジークフリート牧歌》、J.S.バッハ《音楽の捧げ物》から、シューマン「ピアノ五重奏曲」

7/31 東京ヴィヴァルディラグジュアリー Vol.4

東京ヴィヴァルディ合奏団の小編成アンサンブル「東京ヴィヴァルディラグジュアリー」が、宮澤賢治と同じ岩手県出身の俳優・村上弘明をゲストに迎え、賢治作品の朗読を核とする演奏会を開催。ヴォーン・ウィリアムズ《ロージャー・メードル》から和みに満ちて幕が上がったのち、《星めぐりの歌》が弦楽器とオルガンでノスタルジックに奏された。次いで村上の朗読で賢治の童話『さしき童子のはなし』。オムニバスの4話共通の結び文「こんなのがさしき童子です」の深みがある声とニュアンスが印象的だ。ピアノが弱音で添える伴奏音楽はシュニトケ《タンゴ》で、これが不思議とよく合う。《ドラゴンクエスト序曲》を経て伊藤亮太郎(vn)のソロでヴィヴァルディ《夏》。トゥッティにはピアノも参加。後半は渡部宏のチェロ独奏《南部牛追い唄》で始まり『セロ弾きのゴーシュ』の朗読に移る。村上は地の文、ゴーシュ、猫、カッコウ、タヌキの子、野ネズミの母子、楽団長のキャラクターを見事に演じ分け、合奏団はベートーヴェン《田園》、シューマン《トロイメライ》、ポッパー《ハンガリー狂詩曲》、J.S.バッハ《無伴奏チェロ組曲》の舞曲を適所に効果的に挿入。アンコールは朗読付きでヴィヴァルディ《冬》の第1楽章。 ●萩谷由喜子
会場＝サントリーホール(小)／出演＝村上弘明(朗読)／曲目＝すぎやまこういち《弦楽のための《ドラゴンクエスト序曲》》、ヴィヴァルディ《四季》から《夏》、岩手県民謡《南部牛追い唄》、他

7/31 エヴァ・ゲヴォルギヤン p ピアノ・リサイタル

エヴァ・ゲヴォルギヤンは、2021年のショパン国際ピアノコンクールのファイナリスト。現在モスクワ音楽院とスペインのソフィア王妃高等音楽院の学生であるが、年間90以上の公演に出演しているという。

当夜は、ショパンやシューマン、そしてラフマニノフ作品によるリサイタル。作曲家と熱く語り合うかのように作品を読み解き、繊細な感情を深くえぐりだしていくアプローチが印象的である。プログラム前半、しなやかな生命感あふれるショパン演奏であった。「幻想曲」では、和声の豊かな表現を通して彼の人生の光と影をリアルに映しだし、生き生きとした音楽を生みだす。ワルツにおいては、ため息のような動機や半音の微細な動きに心の奥の世界を重ね合わせる。そして、作品10の練習曲。6曲を一つの作品のようにまとめあげ、音の物語を情熱的に語り尽くした。休憩をはさんでシューマン《謝肉祭》。舞踏会に集う様々な人間模様を自在に表わしていく。そして、ラフマニノフ「練習曲集《音の絵》」の抜粋では、鋭敏な打鍵によって、この作曲家特有の濃厚なリリズムを見事に創出。とくに、遠くから鳴り響くようなモチーフの表現が心に残る。 ●道下京子
会場＝浜離宮朝日ホール／曲目＝ショパン「幻想曲」「ワルツ第3・7番」「練習曲集」op.10から、シューマン《謝肉祭》、ラフマニノフ「練習曲集《音の絵》」op.39から

7/31 渡部桃子 p ピアノ・リサイタル

うだるような酷暑続きの7月の最終日。これで“とどめを刺される”と思われたプログラムに覚悟を決めて臨んだが、その“ラスボス”的なブルームス「ピアノ・ソナタ第3番」にむしろ爽快な涼風に心も癒されるような演奏で切り返されたのはうれしい誤算。かつて巨匠たちが定着させた重厚で“硬派”なブルームス演奏の残像は皆無だ。しかし近年の軽量軽質化したアプローチとも違う。彼女の弾くブルームスは謹厳実直と華麗さを併せ持つ。音質や音色は最強音でもうるさくはなく、一つひとつの音やタッチは明解で楽想表現も慈しむように丁寧に扱われる。彼女自身の言によれば10年前のデビュー・リサイタルで取り上げた思い入れの強い曲とのこと。察するに、それからさらに研鑽を重ね細部にいたるまで確信に満ちた解釈と表現を追求してきた姿が目に見えるような演奏である。プログラム前半のモーツァルトとシューベルトでは、“ウィーン伝統”への彼女なりのオマージュや敬意が読み取れる清廉な感覚の息づく表現が聴かれる。そこにリゲティの「練習曲」が2曲。新たなピアノリズムやテクニクを生みだした“ピアノ音楽の未来”への展望も視野に入れた彼女の先進的欲求も示されたのは興味深いところだった。 ●齋藤弘美
会場＝東京文化会館(小)／曲目＝モーツァルト「幻想曲」、シューベルト「ピアノ・ソナタ第13番」、リゲティ「ピアノ練習曲集第2集」から「第10番《魔法使いの弟子》」「第13番《悪魔の階段》」、他

形交響楽団 326回定期演奏会

クは、各楽器の持つ特性がはっきりと響きあう感覚のよさが光った。沼尻はこは、おどけたウィット感、ワクワクするようなリズム感、不気味な響きなどを、見事なテンポ設定で具現した。彼の目指したものは、第1曲から第5曲のそれぞれが、終曲の第6曲へ向かって進むという設計だったのだろう。続くサン＝サーンスは、堀米のセンスが光る。彼女はフレーズからフレーズへの間の取りかたが非常にうまい。弦楽器も呼吸することを知らしめてくれた。往年の音量は若干少なくなった感はあるが、メロディの歌いかたで聴衆を引きこむ力は圧倒的だ。したがって、ことに第2楽章の美しさは特筆されよう。沼尻の配慮したオーケストラの抑えかたもじつにすばらしい。シューマンは堂々たるスケールを披露した。テンポは正統的なものだが、新しい部分に入るときのリタルダンやテヌートのかけかたにオペラ経験が生きている。聴衆も同じ呼吸をしてしまうのだ。自然に体が揺れている。音楽の最も大切なものが歌心だということに改めて実感した。比較的人数の少ない山響がこれだけおらかな演奏をしたことをおおいに評価したい。 ●石川浩
会場＝山形テルサホール／出演＝沼尻竜典(指揮)、堀米ゆずり(vn)／曲目＝バルトーク《舞踏組曲》、サン＝サーンス「ヴァイオリン協奏曲第3番」、シューマン「交響曲第3番《ライン》」

8/3 栗原麻樹 p ピアノ・リサイタル

「フランスからの贈り物、音色の記憶と軌跡」というタイトルがついた演奏会。デビュー20周年記念リサイタルである。15歳で渡仏し12年間の留学を経て帰国。ピアニストとして、人として多くのものを吸収し成長した彼女の軌跡と成果を如実に物語る直截的なプログラムは、むしろ実直さと真摯さを感じさせるものがある。パリジャンのエスプリと澁淵とした才気が生き生きと、しかも嬉々としてその旨味や要所をとらえていくプーランク。秀逸な選曲と巧緻なピアノリズムに息をのむ。ドビュッシー《牧神の午後への前奏曲》を独奏ピアノ版で弾く不敵さ、そして喜悦を描写化した《喜びの島》、さらにはオーケストラの難曲の一つ、ラヴェル《ラ・ヴァルス》を独奏で弾くヴィルトゥオジティ等々、栗原のピアニストとしての根幹にあるヴィルトゥオーゾの資質と、それを“売り”にすることなく音楽の本質的な解釈表現の“糧”にする表現は得がたく尊いものがある。極めつけはデュティユー。彼女のファースト・アルバムのみ曲となったものとはいえ、内容的にも技巧的にも極めて難解な作品。これを完璧に弾きこなす彼女の演奏は既存の名演をも寄せつけぬオーセンティックかつ感動を呼ぶ熱演として評価すべきものと確信した。 ●齋藤弘美
会場＝東京文化会館(小)／曲目＝プーランク《3つのノヴェルlette》《ナポリ》、ドビュッシー《牧神の午後への前奏曲》《喜びの島》、ラヴェル《ラ・ヴァルス》、デュティユー「ピアノ・ソナタ」